
友達より ‘ チョット ’ うえ

瑠華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

友達より「チョット」うえ

【Nコード】

N4058D

【作者名】

瑠華

【あらすじ】

この小説は、綺麗な恋愛系の小説です。

友達より、チョット、うえ1

主な登場人物

- + 朝吹 あさひき 千夏 ちか 中2 幼なじみの陸のことが好き。しかし、中学卒業するまで生きられるか分からない程の重い病気を抱えている。
- + 葉月 はづき 陸 りく 中2 千夏の幼なじみ。サッカー部。同じクラス。千夏の病気のことは知らない。千夏のことが好き。
- + 平岡 ひらおか 鈴音 すず 中2 千夏の大親友。同じクラス。波と付き合っている。
- + 宮本 みやもと 波中 なみ 2 陸の友達。サッカー部キャプテン。同じクラス。
- + 朝吹 あさひき 実夏 みか 小1 千夏の妹。千夏のことが大好き。

プロローグ

私は生きる希望を失っていた。

誰にも迷惑をかけたくないとい人になっていた。

・・・でも、それはわたしが逃げていただけ。

あんたが手をさしのべてくれてなかったら、わたしは今ここにはいない。

「今を楽しく生きてみようとか思わねえのかよ！前を見る！！」

陸、わたし後悔なんてしてないよ

第1話『ともだち』

私の名前は千夏 ちか。よく、ちなつ、って間違われるけど、わたしには、
‘ちか’のほう全然あつてるとおもつ。

わたしは今、恋をしている。叶わない恋をしている。

そして毎日病気と戦ってる。でも、普通に暮らしてる。みんなはわたしが病気だつてことを知らない！知られたくない。大丈夫！すぐ

に元気になる！！……そうお母さんは言うけど、本当は知ってる。

もうわたしの命はそんなに長くないってこと…。

だからわたしはもう誰も好きになれない、なっちゃいけない。
ともだちもいない。1人で生きて、1人で死んでやる。

中学2年の夏。

「おはよう！鈴音^{すず} 今日も可愛いよ」

「なに朝から言ってるの！バカ波^{なみ}！！」

また朝からやってるよ。あの2人。

「あっつ！千夏だ〜 おはよう！」

「おはよう。なに？またケンカしてたの??」

わたしと鈴音は大親友だ！！自分で言うのも何だけど…。

「おすっ！千夏。ケンカじゃないって！！オレは鈴音の彼氏だぞ？

！」

こいつは鈴音の彼氏の…なんて名前だっけ？確か、、そう！波だ
！！…たぶん。

「そうそう。こいつはこんなんだけど、一応彼氏だから。」

「ふーん。付き合ってもケンカはするけどね。。。まあいつか

！！」

みんなわたしのともだちだ！いつもみんなでワイワイやってる。

でも、こいつだけはただのともだちじゃない。。。

「おーす！陸^{りく}！！」「おー！！波。お前朝からテンション高いな…」

こいつ、陸はわたしの幼なじみ。そして私の好きな人。

「おす！千夏。今日も男前だな〜」

「なに言ってるんだよ！！このサッカーバカ！！！！」

「サッカーバカでけっこう。」

なんてことない。いつもの会話だ。何でわたしはこんなにも素直になれないのだろう…。

「あっつ！そうだ！駅前に新しいカフェがきたんだって！！今日の放課後、4人で行こうよ」

「おれらは別にいいけど？サッカー部なぜか今日部活ないし。」

「おれらって、、勝手に決めんなよ！波！！つか、今日休みのの聞いてねえぞ。」

「なんだよ！行きたくないのかよ！！！」

「そうなこと言っただろ？！」

この2人はサッカー部だ！波はキャプテンだから休みってこと知ってたんだろうケド…

「千夏はもちろん行けるよね？」

「ごめん・・・今日は用事があるから無理だ。。。3人で行ってきなよ。」

。 なんとって、今日は病気の検査に行かなきゃならない日だからな。

「なーに言ってるの？？千夏がいなきゃ意味ないじゃん！！」

「そっだよ！！」

「また今度4人でいこうぜ！！」

「ごめんね…ほんとにごめん。。。」

「ともだちでしょ？当たり前じゃん！！」

わたしはこんないい奴のともだちでいることに誇りを持っていた。
「ありがとう」

わたしたちは教室に向かった。4人で… みんな最高の友達だ！！

友達より、チョット、うえ2

第2話『決心と本心』

わたしはお母さんと、妹の実夏^{みか}と病院に行った。

「お姉ちゃん。ダイジョウブ??どこも痛くない?」

「大丈夫だよ!実夏 もう元気すぎて困るくらい」

実夏はまだ小学1年生だ。ほんとに素直で可愛い。なんて優しい妹なんだ!!

でも、わたしだって姉だ。妹に心配させるわけにはいかない。

「それじゃー行ってくるね。すぐ終わるから、静かに待ってるんだよ。」

「うん お姉ちゃん頑張って!!」

そう言ってわたしは検診しに治療室へ入った。

「それじゃー始めます。」

なんてことない。いつものことだ。もう慣れた…

「いやっつ!やっぱ慣れない!!痛い!!」

「あと少しだから我慢して!頑張れ!!」

わたしはこの日が嫌いだ!苦しくて、辛くて、死にそうだ…

「はい。終わり。落ち着くまで、そこに座って待っててね。」

やっと終わった。。

「お姉ちゃん!終わった?」

実夏が入ってきた。

「うん。終わったよ」「お姉ちゃん、だっこして!」「ほら、おいで。」

いつも、こうだ。検査が終わると実夏は必ずだっこしてと言っようになった。いつからだろう…

「検査の結果が出ましたよ。こちらへどうぞ。」

「あっはい！」
実夏には待ってもらい、お母さんとわたしは検査結果をききに向かった。

「検査結果ですが、だいぶ悪化してますね。はっきり言いますと非常に大変な状態です。」

発作の回数が増えるかもしれません。そのときはすぐ薬を飲んで下さい。手術をして成功すれば、今まで通りふつうに暮らせますが、手術の成功率は…4%しかないんです。すぐに決めなくてもいいです。今後のことはゆつくり考えていきましょう。」

あまりにも悪い状態だと聞いたお母さんは泣いていた。
わたしは泣けなかった。泣けなかった。
信じ切ることが出来なかったんだ

家に着いた。わたしはこのときから、もう決めていた。
友達も好きな人も、なにかももう関わらないって。。

自分にはもう生きていく希望なんてない。

もうすぐわたしは、みんなの前から居なくなるんだ。

そう決心したとたん電話が鳴った。

「千夏　！陸くんから電話よー。」

（陸？！うそ。電話なんて何年ぶり？すごく嬉しい！）

「もしもし。千夏です。陸、どうしたの？」

「おおー千夏。今から会えない??」

「えっ！ごめん・・・ちよつと無理だ…」

「まじで！んじゃ、今言うわ」

「何??」わたしはさっき決心したことを思い出した。

「おれ、ずっと前から千夏のが好きだったんだ。オレと付き合い
つて下さい。」

「えっ！それほんと?」

びっくりした。いきなり陸からそんなこといつてくるなんて。。

すごく嬉しい！！でも…

「ごめん。わたしはダメだよ！」

「は？なんでだよ。」

「理由をあんたに言うほど、優しくないよわたしは。あと、もうわたしに関わらないで。」

「なんだよそれ！意味わかんねえよ！！」

「べつに分かんなくてもいい。それじゃ。」

ガチャツツ。

でんわを切った。わたしから・・・

本当はこんなこと言いたくなかった。でも、もう1人で生きていくって決めたから。

わたしはわたしのやり方でみんなを最後まで守るから

友達より「チョット」うえ3

第3話『死へのカウントダウン』

私はいつまで生きられるのだろう。いつも私はそれしか考えていなかった…

不安と悲しみで、心がいっぱいだった。

私は少しずつ死へと向かっている

登校日。学校へ向かう足がとても重く感じた。

「おはよう！千夏」

「……………」

「ん？どうしたの？怖い顔して。」

「……………」もう、私に関わらないで！」

鈴音はびっくりしている。そりやそくだよね。。

「なんで？どうしていきなりそんなこと言うの？」

「もう、疲れたんだよ！ずっと、あんたたちのことウザいとおもってた。」

私がそう言った瞬間、鈴音は泣き出した。

「分かった…そこまで言うなら、もう近づかないよ…」

違う！違うよ、鈴音！！すぐ、そう言いたかった。

でも、今の私が言えることは…

「分かったんなら、もう話しかけないで！波にも言つといて！それじゃ」

…ごめん。鈴音。こうするしかないの。病気のことは知られたくないの。

ごめんね。ごめんね

「ただいま。」

「お帰りなさい おねえちゃん、だっこして!!」

「まただ…。なんで、こんなにも私にだっこしてほしいのだろうか…」

「いいよ!おいで」

「おねえちゃん、どこにも行ったりしないでね。ずっと、実夏のそばにいてね!」

…えっ!私はびっくりした。実夏がこんなに私のことを心配していたなんて、全然知らなかった

「…大丈夫!実夏おいてどっかに行ったりしないから…。ほら!泣かないの!」

「…うん。分かった!もう、実夏泣かない。」

「うん。。。さあ、一緒にお風呂入ろっか!」「うん!!」

改めて、思い知らされる現実

わたしはあと何年生きられるのだろうか。

わたしはあと何日生きられるのだろうか。

わたしはあと何秒生きられるのだろうか

私の、体は確実に、死へのカウントダウンを始めている…

悩んでいたって、時間は静かに過ぎてゆく。

・・・私はもうすぐ消えるんだ。

友達より、チョット、うえ4

第4話『思い出と未来』

雪が降っていた。

私は、今6歳。陸も、もちろん6歳。

私たちは、2人で遊んでいた。雪合戦、雪だるま、楽しい時間。あの、楽しかった冬の日の思い出

「……………うん、、なんか懐かしい夢見たなあ。」

私は、今、13歳。中学2年生だ。

あの、楽しい時間が私の中で、よみがえる。

そして、同時に突きつけられる現実…

「…陸。会いたいよ…陸」

雪が降っていた。あの頃と同じ…

そう、あの日と同じ、今日は2月22日。私の誕生日…

「毎年、陸がプレゼントくれるのになあ」

冬休みがまだ終わっていないこの日、わたしは誰にも祝ってもらえない。

いや、たぶん学校でも、祝ってはもらえないだろう…。私は、自ら1人になったんだから…

「こんなに、寂しい誕生日なんて、生まれて初めてだよ…」

わたしは、1人で泣いていた。ずっと、1人で…

でも、今日から14歳。13歳の自分とは違う。もう、泣かない。

私は、今日、14歳になった。あと、何日生きられるのだろう。15歳までかな…

「分かんないよ。そんなこと、怖くて考えられないよ…」

ただただ、降り続ける雪を、私は、窓から眺めていた。

家には誰もいなく、私は部屋でアルバムを見ていた。

ピンポン。

家のチャイムが鳴った。しかし、家のドアを開ける気はさらさらない。

私は、ほつといたらそのうち、居なくなるだろうと思っていた。

…が!!

ピンポン。ピンポン。ピンポン…

どっかの、ガキのいたずらか!あゝうるせえー!!

チャイムが鳴り始めてから、5分。まだ、鳴り続けている。

さすがに、キレた私は、仕方なくドアを開けた。

そこにいたのは、あまりにも意外な人で、私はびっくりした。

「…陸。」

「お前なあゝはやく出てこいよ!オレずっと、外にいたから寒くて…悪い!おじやまします!!」

「ちよつと、陸。なんで、あんたがここに居るんだよ!」

「何でって…今日、お前の誕生日だろ!もしかして、忘れてた?」

「忘れてるわけじゃないじゃん。そうじゃなくて、何であんたがここに
いるのかを聞いているの!!」

「だから、お前にプレゼント渡しに来たんだよ!いつものことだろ

!!」

「…わたしに関わらないでって、言ったでしょ!帰って!!」

言いたくもないのに、つい出てくる言葉。いや、今はこれしか言えない…

1人で生きて、1人で死ぬって決めたから

「だから、なんで?いきなり、関わるなって言われても…。理由も
分かんないのに。」

「それは…お前に言うほどの事じゃないって、言っただろ!」

「理由を言う気になるまで、オレ帰らないからな。」

「はあ?何、それ!!帰ってよ!!」

「やだ」

帰って、やだの繰り返しが家中に響いた。

そういえば、こんなにも声を出したの、久しぶりだ。

「…わかった。言うよ。わたし、病気なの。すごく重い。いつまで、生きられるか分かんないの！」

わたしは、下を向いたまま、泣いていた…

泣かないって決めたばっかだったのに、だめだな、私は…

「なんだよ、それ！何ですっと黙ってたんだよ！！」

「……。」

「逃げんなよ！オレの顔を、見ろ！前を見る！」

陸は、私の顔を上に向け、私の涙を拭いた…

「陸には、知られたくなかった。陸のことが、好きだから…」

「オレも、好きだよ。まだ、お前には未来がある。誰もいなくなっても、オレが居る」

絶対、無理だと思ってた。叶わない恋だと…

私にも、未来があるのかな？

あと、何回、誕生日を迎えられるかな…

今はまだ、全然分らないけど、私は今を大切に生きていこうと思った。

まだ、私は死んでない。生きてるから

友達より、チョット、うえ5

最終話『明日になれば』

あのあと、鈴音と波ともふつ々の仲に戻って、楽しい毎日を送っていた。

私は、今、中学3年生。今は、受験勉強の嵐がわたしを苦しめる…そんな時期だから、逆に頑張れる！！

「おす、千夏。病院ちゃんで行ってきたか？？」

「うん！大丈夫だよ！！」

陸とは、今付き合っている。陸は、わたしのありのままを受け入れてくれた。

「無理すんなよ？お前、いつも笑ってるけど、ほんとに苦しんでるんじゃないかって…」

「…ちよつとー！わたしをバカにしてんの？ほんとに大丈夫だって！！」

…陸がわたしのことを心配するたびに、胸が苦しくなる。

なんで、わたしがこんな思いしなきゃならないのだろう……なんで、なんでわたしのだろう

「そっか…なら、いいんだけどさっ！！そんじゃー行こっか」

「…うん！！じゃあ、出発」

落ち込んでる場合じゃない！！今を楽しまなきゃ

今日は、陸と2人きりで 久しぶりに海に来た。なつかしい空の色、暖かい太陽、海のおい…昔、ここに陸ときたっけ？

覚えてる。知っている。ここの暖かさ…

「ねえ、陸。昔ここにきたことあったっけ？」

きょとした顔で、陸はわたしを見ている。そして、ため息をついた。

「はあ…お前、忘れてたのかよ！！よく遊びに来ただろ？」

「うん…あつ！思い出した！！おぼれかけてた私を、陸が助けてくれた海だ」

「お前…そこから思い出すのかよ！！」

「ええ、別にいいじゃん。今となつてはいい思い出だよ」

そう言つて、わたしは海までダッシュで駆けぬけた。

「つめたーい。陸もおいでよ！気持ちいいよ！！」

「おい！！あぶねーだろ！！無理すんなよ！！」

陸が、私の腕をしっかり掴んだ。

…わたしの頬に、一筋の雫がながれた。

「おい、どうした？！どつか、痛いのか？！」

「…ない…で…」

「えっ？」

「わたしが今、すごく幸せなのは…死にたくないくらい幸せなのは…誰のおかげだと思つてんの？…わたしのせいで不安になんかならないで」

静かに流れる涙と、ゆっくり流れる時間…大事な時間…

わたしの病気なんかのせいで、無駄にしないで！不安な時間なんかいらない！！

「ごめん…ほんとに大好きだよ。ずっとずっと、そばにいる。」

気づけば、わたしは陸の腕のなかにおさまっていた。暖かな陸のぬくもり。

「なんでだろ？昔から、陸のとなりはこんなにもホツツとする…」

突然、目の前がまっくらになった。

「千夏、千夏…千夏………」

…陸？

陸がわたしを呼んでいる。ちゃんと、聞こえている。

陸！！ここにいるよ！！陸の声、ちゃんと届いてるよ！！！！

「なんでだよ…なんで俺を1人にすんなよ！！目を覚ませよ……」
「なんで？なんで、陸は泣いてるの？」

お母さんも、お父さんも、実夏も…鈴音も、波も！！
なんなの？どうなんてんの、これ！！

「お前は、死んだんだよ。今から、わたしと一緒に天国に行くんだ。」

見ると、そこにはおじいさんがいた。

「誰？あなたは誰なの？私が死んだって…」

「わたしは、お前を天国まで導くもの。見てわかるだろう？みんな、泣いている。」

…そっか、わたし死んじゃったんだ。

「さあ、行こう。朝吹千夏。」

「待つて！！最後に、一つだけお願いしていい？」

「陸と、話がしたい。最後のお別れをいいに…」

おじいさんは、びつくりしていた。

「いいだろう。」

ここは…病院かな？あそこで、陸が泣いている…

「陸！！」

「…千夏？！お前…」

「へへっ、びつくりしたでしょ？わたし死んじゃったんだってね…」

「なんで…」

「だから、最後のお別れを言いに来たの。あのね陸、わたし後悔なんてしてないよ。すごく幸せだったんだよ。笑ってる陸が大好きだったんだよ…だから、泣かないでほしい、ずっと笑っててほしい、幸せになって欲しい。陸はわたしの分まで、生きるんだよ。」

「…分かったよ、もう俺泣かないから。」

「ほんとに、ほんとに大好きだよ。ありがとう。ばいばい…」

次の瞬間、千夏が消えた。

「千夏…俺、もう泣かないから。だから、見守っててくれよ…」

青い空に、一筋の雫が流れた。
流れ星のように、綺麗に輝きながら
わたしの小さな恋は、永遠に輝き続けるよ。
陸、いつもキミは…
友達より、チョット、うえ…だよ。
はいはい。
ずっとずっと、ありがとう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4058d/>

友達より‘チョット’うえ

2011年1月12日23時35分発行